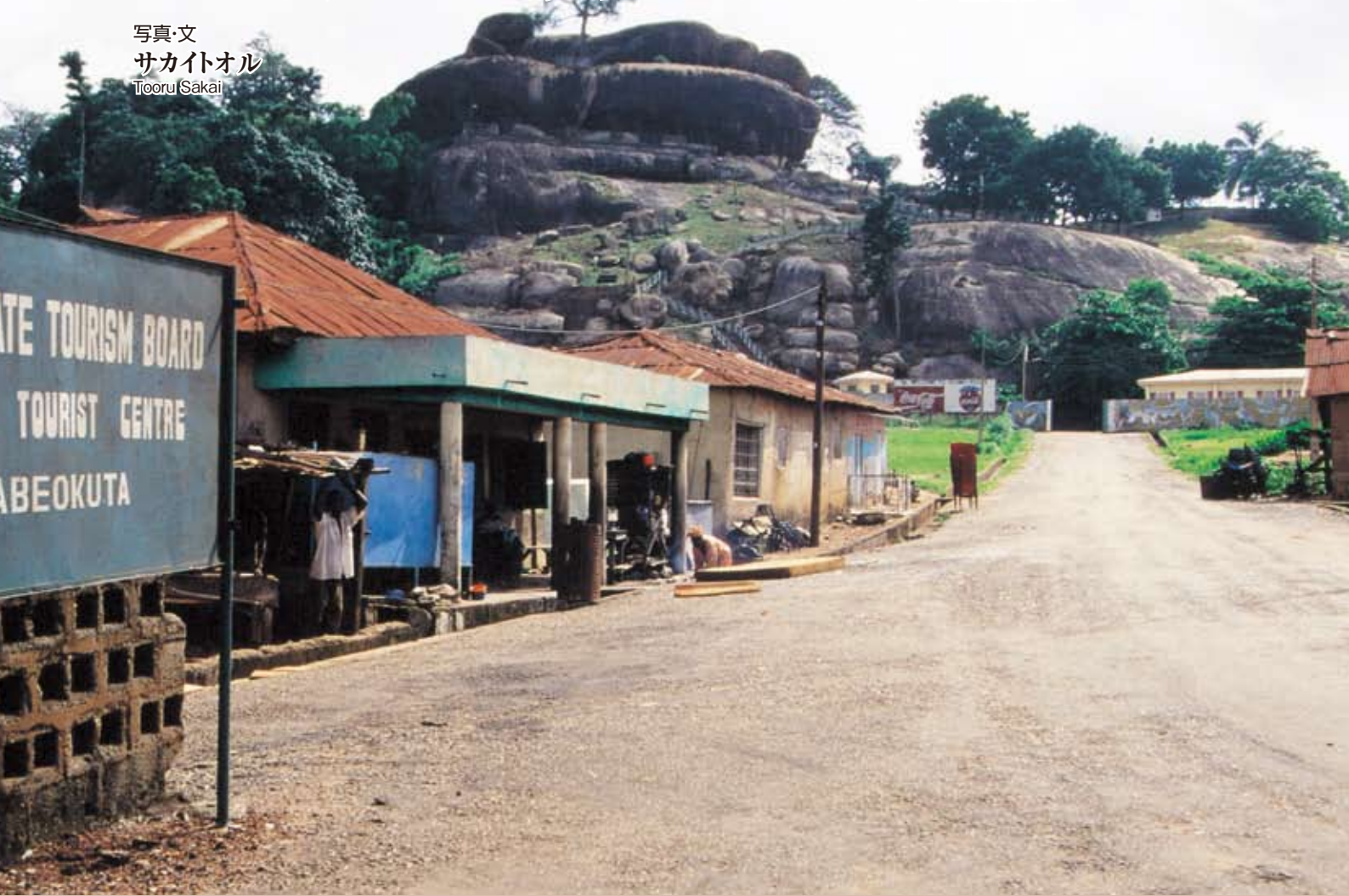


■ フォト・エッセイ ■

ナイジェリア

—— オルモ・ロックとオリシャ信仰 ——

写真・文
サカイトオル
Tooru Sakai



アベオクタの象徴となっているオルモ・ロック。頂上に登ることもできる

ナイジェリア最大の都市である前首都レゴスから、ダンフォォーと呼ばれる乗り合い制のバンに揺られること約二時間。オグン州の州都であるアベオクタという街に、オルモ・ロックと呼ばれている巨岩がある。

大きな一枚岩で出来ているこの巨岩は、ナイジェリアの伝統的な宗教であるオリシャ（神）を信仰しているヨルバ（族）の人たちの聖地のひとつとなっていて、その周りには三つのシユライン（神殿）が設けられている。また、オルモ・ロックには、「聖職者」(?) と思しき女性が常駐していて、悩みことなどの相談に来る人たちに助言をしたりしている。

今回、筆者はシユラインに祀られているオリシャの像を見るために、ナイジェリア人の友人とオグン州を回ることになっていた。彼は、レゴスに住んでいるヨルバ（族）で、二〇年以上前からオリシャを信仰している。友人は、仕事やプライベートで何度もアベオクタに来ているが、オリシャの像を見るために旅するのは初めてだった。

アベオクタのシンボルとなっているオルモ・ロックは、小高い山の上に乗っている。その姿を見ると、昔の人たちが「聖地」としていた理由が分かるような気がしてくる。オルモ・ロックの中腹にある大きなシユラインにいた女性の聖職者に、オリシャの像を見に来たことを話すと、正面にあるシユラインに案内してもらうことができた。彼女が南京錠を外してシユラインを開ける



女性が子どもを抱いている像がシュラインの中に祀られていた



と、そこには高さ四〇センチくらいの像が祀られていた。乳児を抱いてミルクを飲ませている女性の像は、目を大きく見開いていて気味悪く感じられたが、今までに見たことのない像を見られたことは運が良かった。オルモ・ロックを一回りしたあと、シュラインの前で聖職者と話をしていると、友人が占いをしてもらうことになった。

最高位の聖職者が大きなシュラインの中からカウリ（子安貝）とザルを持って来ると、伝統的な方法で占いが始まった。聖職者が初めにしたことは、友人の話を聞くことだった。生年月日、生まれた場所、家族構成、仕事、悩みごとなどを質問している。筆者は、ヨルバ語は分からなかったのですが、同行した友人の弟に英語に訳してもらった。聖職者は、ひととおり話を聞くと、友人から受け取ったお布施をザルの上に置いて一六個のカウリを投げた。

「パラパラ」という音を立ててザルの中に転がったカウリは、六個が裏向きになった。聖職者は、指を差しながら出目を読んでいる。神様のお告げになっているからだ。友人は、ちよつと緊張した様子で成り行きを見つめている。聖職者は、カウリをひとつふたつと動かしながら出目を読み取ると、ボソボソとした口調で話を始めた。聖職者の話は二〇分あまり続いた。

オルモ・ロックに常駐している最高位の聖職者は、ナイジェリアの州政府から聖職者としての認定状が付与されている。これ



占いをするときには、カウリ（子安貝）が使われる

は、ニセモノの聖職者と区別するためのものだ。近年、ナイジェリアでは、「聖職者」を名乗って、金を目的とした商売をする人が増えている。政府は、ナイジェリアの伝統に根づいた信仰と聖職者を守るために認定状を発行しているのだ。占いが終わってからオルモ・ロックの頂上に登ると、友人は、聖職者から聞いた話をしてくれた。

「（聖職者から）厳しいことを言われてしまったよ（笑）。自分の場合、勝手なことをやり過ぎたようだ。家庭のことを考えずに仕事に没頭し過ぎていたのがいけなかったんだ。でも、聖職者は、『これから運気が訪れる』と言ってくれたよ。『今までの経験が生かされるときが来る』って言うんだ…。」

彼は、欧米でも良く知られているナイジェリアの有名なミュージシャンの下で二二年間も働いていた。メインとなっていた仕事は、ミュージシャンの記録写真を撮ることだった。しかし、友人は、ミュージシャンが作っていたコミュニティで生活することが多かったたので、家庭を優先することはできなかった。その結果、妻は田舎に帰ってしまい、三人の子どもたちは、親戚の家で生活しなければならなかった。友人は、聖職者に占ってもらったことによって、元気を取り戻したようだった。

「自分には、『財産』がある。ミュージシャンの写真を売り込むんだ。ニューヨークやロンドンで写真展をやってお金を作るんだ。



オルモ・ロックから見た
アベオクタの街。錆びて
赤くなった屋根が並ん
でいる

そして、家族を呼び戻すんだ！」

ナイジェリアの南西部に住んでいるヨルバ(族)に伝わる宗教に登場するオリシャの数は、四〇〇とも二〇〇〇とも言われている。そのうち重要なのは、鉄の神(Ogun)、水の神(Osun)、雷や稲妻の神(Sango)など一六の神だ。占いのときに一六個のカウリを使うのは、それぞれのオリシャからのお告げを聞くためである。

オルモ・ロックの頂上から見下ろすアベオクタの街は、油絵のように美しい。西側には、赤茶けた色をしたオゲン川が流れ、川の向こうの畑からは白い煙があがっている。街のいたるところに転がっている巨岩を避けるようにして建っている家々の屋根は、赤茶色に錆びて土の色と同化している。友人は、「アベオクタという名前には、『岩の下』という意味があるんだ」と説明してくれた。

聖職者にお礼を言って帰るとき、友人はシュラインの脇にある店で宗教的なものを買っていた。薬にもなるというパーム油などから作ったブラック・ソープ。赤い布が詰められているボトル。車の中に置いておけば交通事故に遭わないという指輪のようなもの。オルモ・ロックは、ヨルバ(族)の人たちにとって、心の拠り所となっている場所なのだ。

(とこかい) とおる／カメラマン)